

経営倫理士の目線で古典を読んできた♪

～古典から学ぶ経営価値四原理システム～

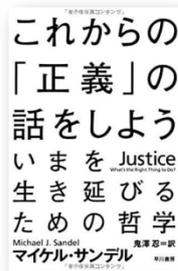
経営倫理士コンソーシアム

代表幹事

北村和敏

第9回投稿（2026年2月10日）

『これから正義の話をしてしよう』マイケル・サンデル 前編



今回は、以前テレビ番組「ハーバード大学・白熱教室」で大ブレイクしたマイケル・サンデル教授の『これから正義の話をしてしよう』の前編を取り上げます。自分たちのコミュニティの倫理や習慣を重視するコミュニタリアリズムの旗手としてのサンデル教授の思想は現代人を惹きつける何かを秘めています。

「正義」と言ってもモノの見方や時代、環境によって捉え方は違うようです。その「正義」についてサンデル教授は、三つの基準で説明していきます。それは「福祉（利益・幸福）の最大化」と「自由の尊重」、そして「美徳の推進」です。思想のメリット・デメリットを比較しながら「正義」の議論を盛り上げるあたりはサンデル教授の真骨頂なのでしょうね。

さて、今回の前編では福祉と自由について深堀したいと思います。「福祉（利益・幸福）の最大化」は功利主義的であり、納得感もそれなりにあるかと思います。多数派こそが正義という考えは、一見合理的であり、ロジカルで分かりやすいですね。特に民主主義国家ではたしかに数は正当性を生みます。しかしデメリットとしては少数派の意見が無視されることです。少数派から見たら個人の自由が侵害されたと思いますよね。常に少数派は不正義へと追いやられます。

余談ですが、日本において明治初期の政治家や官僚たちは、欧米からこの功利主義の思想を積極的に輸入したようです。ベンサムやJ・Sミルの翻訳本がよく読まれたようです。

早稲田大学の創設者である大隈重信や協力者の小野梓なども精読していました。明治新政府にとっても「貧しい日本からの脱却」のためにはまずは全体を豊かにすることが最重点課題だったのでしょうね。モノカルチャーな発展途上の組織や国家はまずはここからですよ。豊かでもない国家で一人ひとりの自由が大事だとか、少数派の意見もちゃんと聞けと言われても優先順位があります。しかし、いつまでも、これを放置すると大きなしっぺ返しが待っています。戦後の経済発展を見ても経済的な豊かさを追求しすぎたために、公害という公共性を破壊する大問題が発生しています。戦後の四大公害の一つである「水俣病」などは功利主義的な経済優先政策が招いた人災ですね。

余談の余談ですが、この水俣病患者を題材として書かれた石牟礼道子氏の『苦海浄土』は涙なしには読めない実録です。水銀中毒は妊婦にも悲劇が襲い掛かりました。水銀に汚染された魚を食べた妊婦はお腹の子供が水銀を吸収し、ほとんどは死産となります。しかし、ある意味、胎児が母親の命を守った皮肉な状態になっていたのです。そうなのです。胎児が母体の身代わりになったのです。悲劇は続きます。生命力のある胎児は、半身不随の脳性麻痺の子供として生まれてくるのです。普通に生まれていたら素晴らしい運動能力と知力をもった子供だったに違いありません。母親が子供を抱いて入浴している「水俣のピエタ」の写真は有名ですが、なまじっか運動神経が優れたいた胎児だったことが更なる悲劇を生む結果となったようです。子供を入浴させる母親はまるで神の子を抱いたような表情も印象的です。そうです。マリアのような眼差しで我が子を見つめています。この他にも「四日市喘息」や「イタイイタイ病」なども悲劇でした。「絶対多数の絶対幸福」をスローガンに高度経済成長を求めすぎたのです。少数者の意見に耳を傾けることの大切さを学ぶにはあまりにも重たい代償だったようです。

余談が長くなりました。『これから正義の話をしよう』の感想に戻ります。「福祉（利益・幸福）の最大化」と「自由の尊重」に立ち返ります。功利主義のデメリット（少数派の否定）の反面教師のように出てきた「自由の尊重」により、一人ひとりの人権が尊重されていきます。多様性が尊重され、少数派がすくい上げられるのは素晴らしいことですが、これも程度次第ですよ。行き着く先は、他人の自由を侵害しなければなんでもありの世界、まさに「個人の欲望の暴走」が起きます。「私は私のもの」を合言葉にすべてを市場に任せるほうが、結果的にメリットが大きいと主張したいようですが、いささか感覚的にもうちょっと公共性に配慮してよ、って言いたくなりますよね。ノージックやフリードマンなどリバタリアン（自由至上主義者）の人たちは極端すぎる思想のようにも思えてきます。まるで不完全な人間が決めたルールなどは強制と腐敗の温床になると言いたいのでしょう。市場に委ねることが最良だと言いたいのでしょう。16世紀にイギリスの評論家マンデヴィルが説教本『蜂の寓話』の中に「私的な悪徳は公益となる」と言いました。これが資本主義の原理とされます。貪欲な利益追求が見えざる手によって、結果的に公益を推

進するのだとしたのです。そのとおりにマンデヴィルの言葉は証明されます。しかし規範としてはこの言葉は認められたことはなかったとドラッカーは言及しています。そうなのです。資本主義は成功するほどに受け入れ難いものになっていくのです。正統性を持たない資本主義の暴走への危機感を募らせたドラッカーは「マネジメント」を発明し、マンデヴィルの思想にぶつけたのです。組織の基盤となる原理は「私的な悪徳は公益となる」ではなく、「私的な強みは公益となる」としたのです。これがドラッカー・マネジメントの正統性の根拠となっています。

リバタリアンの思想はそういった正統性に欠けているとドラッカーは言いたいようです。利益の極大や利潤動機のためなら人間を機械のように扱う姿勢では社会は倫理的に機能しないとりたいのでしょうか。しかし、これに対してもリバタリアン信奉者は市場の原理に任せれば、いつしか道徳・倫理も醸成すると、すごく楽観的な考え方をしています。人間観の違いなのでしょう。人間の尊厳すら怪しくなってきます。それとも資本主義というものが人間観を狂わすのでしょうか（悩）。資本主義という檻の中では常に道徳・倫理という襟を正す習慣を意識し続けるが不可欠です（ドヤ顔）。

さて、「正義」を考える時、平等主義的自由を唱えるカントとロールズの思想は現代人には受け入れやすいのではないのでしょうか。カントの言う「自由とは自律である」も、ロールズの「無知のヴェール」も、それぞれが善と思うことが正義だと言いたいのでしょうか。自由に対して平等な立場で「みんな違って、違っていいんだ」と言われればなんとなく納得しそうですが、物事が複雑に絡み合う現実社会では完全な自律などありえませんよね。何らかの影響を受け、反応している自分がいることは間違いないでしょう。「安楽死」問題などもじつに考えさせられますね。身体的な苦痛に耐えかねて安楽死を望む患者もいれば、家族の経済的な負担を危惧して安楽死を望む患者もいます。そうなのです。死にたくないが迷惑も掛けたくないというジレンマの中で終末を迎えるのは人間の精神衛生上よくないですし、不幸ですよ。

安楽死を認めている国としてはカナダ、オランダ、ベルギーが有名です。医師は患者の要望を聞き入れ積極的な安楽死を施行しています。肉体的な苦痛から逃れたい患者や家族への配慮など理由は複合的です。また高齢になって自分の人生に悔いがなくなったと言って安楽死を望む患者もいるでしょう。安楽死を望む患者の心理は千差万別であり、原因が複雑に絡みあっているだけに法律で決めるのは困難なのでしょう。安楽死を法律化した国でもいまだに議論がやまないのが現状のようです。日本では安楽死は違法ですが、病院では患者に意識がない場合、患者の家族の同意のもとに積極的な治療を止めて、死を迎えられるような「消極的安楽死」の方法も実施されています。また、がん患者によっては最初から延命のためのがん治療を拒否する選択をしているようです。

安楽死問題で思い出すのが森鷗外の小説『高瀬舟』です。江戸時代の京都を舞台にした小説です。主人公は罪人を流刑地まで護送する役人です。ある日、弟を殺した罪で罪人となった人物をいつものように流刑地まで護送していたときに、この罪人の様子を見て驚きます。悲壮感などどこにもなく、むしろ穏やかで満ち足りた様子だったのです。話を聞いてみると、じつは自分には病気で苦しむ弟がいたのだが、貧しくて治療も受けられないばかりか、食べ物も十分に足りてない状態だったと語ります。弟は苦しみに耐えかねて自殺を試みますが死にきれず、自分に「楽にしてくれ」と頼んできたというのです。兄である自分は弟の苦しみを終わらせるために自分で手を掛けたというのです。そうなのです。兄の弟への深い愛情からの行為だったことを知った主人公の役人は目の前の罪人が犯したことはほんとに罪なのか、人の幸せとはなんなのかを深く考えさせられます。弟を手にした兄の行為は、法律上は罪なのですが動機は「愛情」なのです。法律では解決できない人間社会の境界線の曖昧さを考えさせられる内容になっています。

余談の追加ですが、昭和の司会者は、演歌歌手を紹介するときのフレーズとして「歌は世につれ、世は歌につれ・・・」が鉄板でした。これは世の中を反映して歌われる歌もあれば、世の中は歌によって変化していくことを言い当てた秀逸なフレーズなのです。法律もこれと同じことが言えそうです。「法は世につれ、世は法につれ」ですかね。世の中から望まれての法律もあれば、世の中を変えていくために作られる法律もあるようです。新聞に新しい法律が掲載されたら、まずはこのことを頭に思い浮かべて一読するのをお勧めします。

今回は、ベンサム功利主義、ノージックの自由至上主義、そしてロールズの平等主義を通してメリット、デメリットについて雑学を交えながら感想を述べました。雑学がメインななっ節をお許してください。(北村